

M蛋白血症例を除いた形質細胞増加に関する臨床病理学的検討

津田 勝代, 前川 芳明, 松尾 収二 (天理よろづ相談所病院)

骨髓検査において、M蛋白血症がないにも拘わらず形質細胞が増加した例に遭遇する。今回このような事例についてどのような状態で形質細胞が増加しているか検討した。

【対象および方法】

対象は、1996年1月～2004年3月までに骨髓穿刺が施行された4763件のうち形質細胞が骨髓有核細胞の5%以上の増加を認め、かつ骨髓腫、M蛋白血症例を除外した59例とした。これらの症例についてカルテ検索を行い、臨床所見、骨髓像、末梢血液検査所見等を抽出した。

【結果および考察】

59例の疾患の内訳は、再生不良性貧血24(形質細胞5~62.6%)、白血病17(5~38.4%)、悪性リンパ腫8(5~11.1%)、自己免疫性疾患5(5~6.7%)およびその他5例(5.1~8.4%)であった。

形質細胞数とグロブリン量(%)には相関は認めなかった。グロブリンが基準範囲もしくはそれ以下(23%未満)の例は48例、グロブリン高値(23%以上)は11例であった。前者48例中37例(63%)は骨髓細胞密度低形成

で、内訳は再生不良性貧血の23/24(92%)、化学療法中の白血病12/17(71%)、悪性リンパ腫の1/8(13%)およびその他の1/5(20%)例であり、形質細胞の増加は相対的増加であることが示唆された。なお再生不良性貧血で形質細胞が62.6%と著増した例は薬剤性の再生不良性貧血と診断され、薬剤投与中止とともに造血は回復し形質細胞は減少した。

グロブリン高値1例は、骨髓細胞密度正形成から過形成の白血病4例、悪性リンパ腫2、自己免疫性疾患2、その他1と低形成の再生不良性貧血1例であった。このうち白血病と悪性リンパ腫は化学療法後、また再生不良性貧血は免疫療法後、形質細胞とグロブリンの減少がみられた。これらの病態は理解できなかったが、原疾患と形質細胞が関連していることを示した。

【まとめ】

形質細胞の増加には骨髓低形成に伴う相対的な増加を示唆する例や白血病、悪性リンパ腫など原疾患と形質細胞の増加が関連する例がみられた。

連絡先 0743-63-5611(内線8921)